

わったい

鳥取養護学校
研究研修部だより
第15号
平成26年9月1日

夏休みが終わり、いよいよ1学期のまとめの時期となりました。先生方が校内・校外でそれぞれ夏休み中に研鑽を積まれた成果を順次実践にうつしていられる時期でもあります。

『わったい15号』では、3か年研究の2年目としてスタートした「一人一人の社会参加につながる生きる力を育む授業づくり」という研究テーマのもとでのグループ研の進捗状況と、1グループが取り組んでいる発達障がいへの理解についてまとめていきたいと思います。



～ グループ研の進捗状況 ～

1 グループ テーマ：病弱の児童生徒の基礎的な学力と人や社会と関わる力を高める授業づくり

1 昨年度の研究から

本校の病弱の児童生徒が学習上示しやすい困難性は、次の3つであることが明らかになった。

- ①書字や計算等の難しさ
- ②集団での学習に対する恐怖や不安そして回避行動
- ③学習内容の定着の難しさ

これらの困難さの背景には、視覚で捉える力の弱さ、周囲から受ける刺激に対する過敏性、過去の失敗体験による自己肯定感の落ち込み、認知処理過程のプランニング能力の弱さなどがあることが推測された。本校の病弱教育に携わる教職員に必要な力として、心身症や発達障がいなどの正しい理解、心理面の課題に応じたアプローチの工夫、認知処理能力に着目した指導の工夫が考えられた。

2 今年度の取り組み

- ① **理論研修**：「心身症の児童生徒」、「発達障がい（特にアスペルガー障がい、学習障がい）を併せ有する病弱の児童生徒」についての理解とその指導方法についてのミニ講座を設定し理解を深める。
- ② **個人実践研究**：メンバー一人一人が、日々の実践を仮説検証スタイルでまとめていく。対象となる児童生徒は1名とし、介入を行う場面は1つの場面で1つの指導目標とする。児童生徒が示す困難性に対して、どのような手だてを行いどれだけの変容をねらうのかを、先行研究の知見などを参考にしながら検討し解決を図っていく。12月には、病弱教育に精通した講師を招へいし、その研究実践報告について指導助言を受け、メンバー一人一人が自己の実践を理論的に見つめ直すことを計画している。

2 グループ

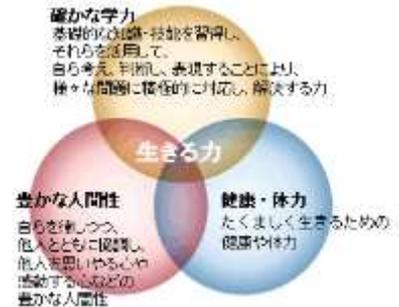
テーマ：身近な社会の中で生きる力を育む授業づくり

1 理論研修

生きる力とは、「意欲、自己肯定感、成就感などを育みながら経験を積み重ねていくことにより、実際の生活の中で生かしていくことのできる力」であり、将来の社会参加への基盤となる力と考える。

< 6 / 24 ; 『自己肯定感』についての理論研修及び意見交換 >

- ・自己肯定感の言葉の意味を再確認後、グループ内の職員2名より書籍や資料の紹介を通して、「自己肯定感を高める」という視点で情報提供をしてもらった。
- ・自分自身の『自己肯定感』のとらえと普段の児童生徒とのかかわりや授業への生かし方などについて意見交換をした。



2 実態把握

太田のステージやS-M 社会生活も可能な限り活用しながら、普段の様子と合わせて丁寧に行う。

3 一人一授業公開（授業実践）及び7 / 24 ; 授業研究会

(小) 竹内先生 ; 図画工作「小麦粉粘土を作って、クッキーやさんになろう」(7 / 9)

(中) 高橋先生 ; ことば「絵本を楽しもう ～いろ・かたち～」(7 / 14)

(高) 福代 ; 課題「生活に必要な力を身につけよう」(7 / 14)

- ・それぞれの授業のビデオを見ながら、児童生徒の様子等を含め指導の中で大切にしたい「関心・意欲・態度」「自信・自己肯定感」「成就感・達成感」について授業者が自評を行い、グループの職員が感想・意見を出し合った。

3 グループ

テーマ：子どもの実態に応じた自立活動の指導の充実

1 実態把握

昨年度から「感覚と運動の高次化」理論を取り入れ実態把握を行ってきた。今年度はこの理論を提唱する淑徳大学発達臨床研究センターの川口真理子先生を招聘し、発達的に子どもを捉えることの重要性を学んだ。発達の順序性と水準を理解して、今していることが何に繋がっていくかを考えていく必要があるということであった。発達水準や教材教具など具体的な内容も多くあり、充実した講義であった。

2 学習内容の見直し

イメージする将来の姿と将来の姿になるために今必要な力は何かを、小グループで話し合った。それをまとめ、年度末には自立活動の指導内容の見直しを図っていく予定である。

3 教師の学習指導の方法

一人一授業実践を行っている。授業の動画を見ながら、授業支援会議の形式で指導内容や支援について小グループで話し合いを実施した。9月にも指導案を書いて2回目の授業支援会議を実施し、授業改善につなげていく予定である。

* 『目からうろこ』の発達障がい・・・

『発達障がい』について研修をたくさん積まれている先生、『発達障がい』について学び始めたばかりの先生・・・さまざまな先生方を対象に、どのような内容を紹介しようかと迷いながら原稿を書き始めたときに、『発達障がい者の立場から ～体験談から学ぶ～』（鳥取県東部地区特別支援教育研究会）という講演に出会いました。支援者としての視点と発達障がいの当事者としての両方の視点からのお話が聞けるというので、期待して研修会に参加したのですが、期待をはるかに上回るお話を伺うことができたので、書き始めていた原稿を破棄し、その講演で伺ったことについて書くことにしました。

講師は、発達障害児者支援サービス スモステABA、山陰発達障害当事者会 コスモテの会の難波寿和（ナンバ ヒサカズ）さん。自己紹介によると、現在32歳の臨床発達心理士で、社交不安障害・鬱病があり、特定不能の広汎性発達障害（ADHDとのハイブリット）と平成24年に診断されたとのこと。（以下、ご本人が『発達障害』という表記で講演資料を作成されていたので、ご本人の表記を使います。）

就職後に自分は発達障害では？と気づいたものの、空気を読めないことを否定し、自分は治ると思いつけられたそう。就職後は①不安が拭えず先が見通せない。②できることとできないことのアンバランスに周囲は困るが、自分では気づかない。③ミスばかりで、指摘されると大パニックになる。の3点で大変難儀され、相談に行くという行動を早くとれば良かったのにと痛感されたとのこと。そのためは、保護者だけが相談に行くのではなく、小学校の低学年から当事者も一緒に行き通い慣れておくことが大事と話されました。高学年になると当事者が嫌がり始めるので、低学年からというタイミングがポイントとのことでした。

職場を転々 → 対人トラブルは減少しない → いじめ → フラッシュバック
→ パワハラ・セクハラ・窓際族対応 → 資料の打ち間違い、ハウ・レン・ソウの滞り → 罵倒・叱責・否定・言葉の暴力 → 信用の低下 → 鬱・不眠 → 休職 → 別居 → 離職（昨年8月） → 離婚 → 発達障害・人を恨む

以上のような経過を振り返り、「小学生の頃に人と関わることやトラブルの解決法を学ばなかった。」と話されました。

どんなに恨んでも状況は何も変わらず、やがて『ぼちぼち再起』の段階になられたそうです。その時に、①どうやったらうまくやっていけるか？という考え方にシフトすること。②自分に対する応援団（Dr. や発達センターの方など）を良いコンディションのうちにつくっておく（状況が悪くなってからでは、相談に行きにくい）こと。③周りと比較しないこと等を考えられたとのこと。

そして、『ゆるゆる再起』の段階になると、①自分の心の声を静かに聞き、人とのつながりを大事にする。（そのためは、自分が思っていることをどう伝えるのか？伝える力や相

談できる力が重要。) ②人のせいにせず、自分の責任で自分の人生を生きる。という風に変容されたそうです。

現在は、フリーランスでゆるゆる働き、

①自分が得意なことを高め、**売り**をつくる。

× ~はできません。 ~を配慮してください。

○ ~ができます。 ~を頑張れます！

②ペースメーカー（並走してくれる人）をつくり、失敗したら直ぐに相談する。

○ 「失敗した！」と言えることが大切。

③服薬の調整と思いついた休息。を心掛けておられるとのこと。

最後に、障がい当事者としての視点が、目からうろこでした。

①発達障害ワールドと定型発達ワールド

「定型の人（発達障害のない人）は、何を考えているのかな？」

→ お互いに分からないからこそ**橋渡しをする人**が重要。

②なぜ目を合わせないといけないの？

目を見ても、表情を見ても、何もわからないのに。

「『やれ！』って言われれば、やるけどさ。」

→ 目を見ることの**メリット**を教える。

「目を見ない時よりも、目を見て話すときの方が指示が通りやすいよね！」

③『共感』って何？

定型の人（発達障害のない人）は、なぜ噂をするの？

なぜすぐに集まるの？ なぜいじめようとするの？

→ **共感の仕組み**を教える。

定型の人（発達障害のない人）は、話したり集まったりすることで、不安を減らしている。

まとめ

生き易く生きたらいい。工夫しよう！

共に生きよう！

決して見放さないから。



疑問や質問があれば、

kireina_himawari@yahoo.co.jp へ
ツイッター・ツイキャス に出没中

@jetstarmans お気軽にフォロー どうぞ
発達障害児者支援サービス スモステABA の紹介

個別カウンセリング及び療育 集団カウンセリング
ペアレントトレーニング 機関コンサルテーション
発達障害の専門的な検査 講演活動（支援者・当事者として）

とのことでした。

目の前にいる発達障がいと診断されている子どもたちが、社会に出てどのような壁にぶつかるのか、壁を少しでも低くするために学校時代にどんな指導をしておく必要があるのか等、いろいろ考えさせられる講演でした。

講演を聞いた本校の先生は数名だったと思います。もっと詳しく知りたいと思われた先生は、パワーポイントの資料を持っていますので、いつでも声をかけてください。



* 『ちょっと一息』 こんな本はいかがでしょう？

『発達障がい』関係の本はたくさん出版されていますが、当然、保護者も勉強されているはず・・・そこで、『本屋さんで保護者の方が手に取られそうな本』という視点で紹介してみたいと思います。

○『わが子は発達障害 心に響く33編の子育て物語』

全国から一般公募した「発達障害をもつ子どもの子育て体験記」の受賞作品を収録。巻末には資料編として、発達障害の相談機関や関連書籍の紹介などの情報も掲載。

編者 内山 登紀夫（福島大学大学院教授・よこはま発達クリニック院長）

明石 洋子（社会福祉法人あおぞら共生会副理事長、川崎市自閉症協会
代表理事・会長）

高山 恵子（NPO法人えじそんくらぶ代表、臨床心理士、薬剤師）

出版 株式会社ミネルヴァ書房

○『発達障がい児が普通級に入れた！医師も認めた！ぶっちぎりすごいい！！』

子どもの脳にいいこと3』

日本海新聞にPRあり。

タイトルに驚き、手を伸ばしたくなる本。

エジソン・アインシュタインメソッドの紹介があり、気絶するほど子どもを褒めたり、しっかり抱っこしたりすることなどを推奨。

『お子さんの体質改善』のためにということで、食事についての記述も豊富で、胎便を出すこと、デトックス、しっかり摂りたい栄養素など視点が新鮮。

読んでみると、10分間バスタイム学習法、5つの魔法の言葉かけなど、「EEメソッドは私にもできそう！」と、保護者が今日からでも実行してみようと思われそうなものが満載でした。

著者 内藤 眞禮生（ブルークリニック青山 院長、医師、医学博士）

鈴木 昭平（一般社団法人エジソン・アインシュタインスクール協会
代表）

発行所 コスモ21

保護者が読んでおられる書籍を教員も読んでいけば、共通の話題から和やかな話になったり、信頼を得やすかったりということがあるかもしれません。教員という意識では手に取らないかもしれない書籍の中に、教材のヒントが隠れていることも・・・。

『読書の秋』・『食欲の秋』を前に読書の偏食をやめることをお勧めして、『わったい15号』の締めくくりとします。次号16号でもさらに耳寄りな情報をお届けしたいと思います。教師の知識のふくらみが目の前にいる児童生徒に反映できることを祈りながら、次号の担当にペンを引き継ぎます。

ありがとうございました。

